2026年 10月10日発行

エコ・リサ通信

特定非営利活動法人
埼玉エコ・リサイクル連絡会広報
第 133 号

エコ・リサ学習会　報告

「フランス“と”考える、洋服と廃棄の問題」



清香　フェリックス氏

2026 年 9 月 7 日月曜日 18:00 から、Zoom で「フランス“と”考える、洋服と廃棄の問題」と題し、フランスより講演をさせていただきました。私は 2011 年からファッションと環境問題について継続的に取材・執筆し、2018 年 10 月からフランスに在住しています。フランスで暮らす中で得た生活者としての実感と、これまでのファッション・環境分野での取材経験をもとに、今回の講演の内容をまとめました。

講演では、まず日本との比較を通してフランスにおける衣料品の消費の特徴をざっくり把握し、その後、フランスの衣料品の回収・再使用・リサイクルの仕組みを紹介しました。それから、衣料廃棄の問題は家庭から出るゴミだけでなく、売れ残りの事業ゴミも多いこと、それに対するフランスの法律と、その結果起きたこと、さらに衣料廃棄の問題を根本から見直すために作られた「反ファストファッション法」について紹介しました。

フランスも決して完璧な解決策を持っているわけではありません。しかし衣料廃棄の問題を、販売、消費、回収、再使用、リサイクル、さらには海外輸出までを含む循環全体の問題として考え、対策しようとしている点は、日本も学べるのではないか。そう考えて紹介しました。以下、講演の内容をまとめます。

●日本とフランスでは、衣服はどのくらい捨てられているのか

講演の最初に、日本とフランスの衣料品の流れを数字で比較しました。
衣料品の市場投入量や家庭から出る衣服、分別回収される衣服の量を見ると、日本とフランスでは思いのほか近い数字だとわかります。ところが、日本の人口は約 1 億 2,435 万人、フランスは約 6,908 万人で、日本はフランスの約 1.8 倍です。『フランス人は 10 着しか服を持たない』という人気書籍によるイメージとは対照的に、実際にはフランスでは日本よりも一人当たりの衣料品市場投入量が多く、衣料品の消費量は決して少なくありません。そして、少なくとも「フランスは衣料品をあまり消費しない国」というイメージは、数字からは支持されません。

TeRA 一般社団法人 繊維リサイクル協会　http://tera-jpn.or.jp/index.html

指標	日本	フランス	比較上の注意
① 市場投入量	**約79.9万t**（2023年、家庭への新品衣類）	**約83.3万t**（2023年、TLC）	日本＝衣類、仏＝衣類＋家庭用リネン＋靴
② 家庭から手放された量	**約84.7万t**（2023年）	**約69万t程度と推計**	フランスは推計方法に注意
③ 家庭ごみになった量	**約46万t**（2023年）	**約42万t**（推計）	仏の42万tは2017年データを用いた推計
④ 分別回収された量	**約19万t**（2024年版フロー）	**約26.8万t**（2023年）	日本の19万tは2024年版推計
⑤ リユースされた量	**約15万t**（2023年、家庭から手放された衣類の約18%）	**約11.7万t**（2023年、TLC）	定義が完全には同一でない
⑥ リサイクルされた量	**約6万t**（2023年、家庭から手放された衣類の約7%）	**約5.9万t**（2023年、TLC）	仏はリサイクル向け58,500t

※日仏で調査方法・対象範囲が異なるため、ざっくりと感覚を掴むための参考として考えてください。

●フランスでは、家庭から手放した服を回収する仕組みがある

こういった特徴のあるフランスでは、衣服を家庭ゴミに入れる前に、別のルートへ出すための回収インフラを用意しています。衣料品・家庭用リネン・靴をまとめた「TLC（Textiles, Linge de maison, Chaussures）」について、自治体が回収ボックスを設置しているのです。またブランドや店舗などにも回収ボックスが設置されています。





自治体の回収ボックスは、その後 NPO 等が選別と再販を行うことが多いです。こういった NPO の多くは、その作業を失業者や移民等の就労支援と結びつけることで助成金を得て、活動を持続的に行っています。

税理士法人 T&M ソリューション
毎月第２水曜日は「税の無料相談日」 お気軽にお問い合わせください！
お問合せ ☎０３－５８２９－９６６４ E-mail info@tms.or.jp

●「回収＝リサイクル」ではない
では、回収された服は実際にはどうなるのか。
2023 年、フランスでは使用済み TLC が約 268,000 トン回収され、そのうち約 188,000 トンが選別されました。以下の割合は、この「選別された衣料品」の行き先を示したものです。
・フランス・欧州での再使用 ＋ 海外での再使用・販売（58.6%）
・新しい糸・新しい布地、建築用断熱材、自動車用・家具用などの不織布、複合材料としてリサイクル（22.6%）
・ウエスなどへの利用 （9.86%）
・エネルギー回収 （8.78%）
・最終処分 （0.15%）
などに分かれます（数値は 2023 年のもの）。

つまり、回収ボックスに入れた服がすべてリサイクルされるわけではありません。再使用できる服、素材としてリサイクルできる服、ウエスなど別の用途に回る服、エネルギー回収される服など、状態や素材によってその後の運命は異なります。

●南フランス・シストロン村の選別現場より



人口 7,000 人強のシストロン村周辺では、2 つの村から集められた TLC を扱う NPO の選別拠点があり、毎日、10kg 程度の袋を約 100 袋分別しているそうです。そこで働く人からは、「フランス国内では再販売できない衣服がほとんどである」という話を聞きました。その理由として、SHEIN などのウルトラファストファッションの衣服が非常に多いことが挙げられ、「仕事を始めて 1 週間ほどで、触っただけで SHEIN の服がわかるようになった」と話していました。
SHEIN とは、ウルトラファストファッションと呼ばれるファッションブランドです。素材は化繊の混紡が多く、数回着ただけで弱るような品質、セクシーなデザインが多いのが特徴です。数百円という非常に安価な洋服で、特に若者世代の間で人気です。SHEIN だけでなく、TEMU や BOOHOO といった、他のウルトラファストファッションもありますが、こういった服は再販に向かないのです。

●フランスのリユースシステムは「輸出」に依存している

2025 年のフランス政府報告によれば、フランスまたは欧州で買い手がつかなかった、選別後の中古衣料の約 90％が輸出され、その量は 10 万トン規模に達します。主な輸出先はアフリカです。つまり、フランスの衣料リユースシステムは大きく海外輸出に頼っている状態です。

しかし、輸出された衣服がすべて現地で中古衣料として再使用されるわけではありません。報告では、輸出された衣服の 10～40％程度が現地で中古衣料として販売されず、廃棄物となっていると言います。

つまり、いったんフランス国内では「ゴミ」としなかった服が、輸出先では、販売されなかった衣料品を適切に処理するインフラが十分でない場合もあり、廃棄物がゴミ山となって環境負荷を生じさせることがあると、問題になっています。

●衣料廃棄には「家庭ゴミ」と「事業ゴミ」の両方がある――AGEC 法

また衣料廃棄というと、着なくなった服を家庭から捨てることを想像しやすいですが、実際には企業が販売できなかった売れ残り衣料品も大量に存在します。2022 年の数字では、日本では約 19.7 万トン、フランスでは約 12.0 万トンの衣料品が売れ残っていると推計されます。

「企業が洋服を捨てられないようにすれば、あまり作れないようになり、ゴミも減るのではないか？」と考えたのではないかと予想しますが、フランスでは、この問題に対して法律による介入も行われています。

2020 年に成立した「循環型経済に関する廃棄物対策法（AGEC 法：Loi n° 2020-105）」では、衣類・家庭用リネン・靴などの売れ残り新品について、2022 年 1 月から廃棄が禁止されたのです。事業者は売れ残った商品を単純に廃棄するのではなく、再使用、寄付、リサイクルなどの別の出口へ回すことが求められています。

日本では約 20 万トンの売れ残りが存在する一方、その後の処理については企業・流通側の対応に委ねられています。一方で、フランスでは「捨てる」という選択肢そのものを法律によって制限したのです。

この AGEC 法によって、売れ残りを単純に廃棄することができなくなりました。事業者にとっては、販売、値下げ・在庫処分、寄付、リサイクルなど、別の出口を確保する必要があります。同時に、こうした制度とは別に、ウルトラファストファッションの台頭によって、非常に安価な衣料品が大量に市場に供給される状況も生まれています。

この結果、「安い服があることが当たり前になる」という社会変化起きてしまったと考えられます。これでは、いつまで経っても服の廃棄量は減りません。

司法書士竹内啓修事務所

お問合せ　☎０４８－９６３－６０５５　　不動産・商業登記全般

●フランスはさらに「元を断つ」方向へ
そんななか 2026 年 7 月、フランスではさらに踏み込んだ法律が成立・公布されました。いわゆる「反ファストファッション法」、正式名称は、「繊維産業の環境影響を削減する法律」(Loi n° 2026-602 du 8 juillet 2026 visant à réduire l'impact environnemental de l'industrie textile)です。

AGEC 法が「売れ残った服を捨てない」という出口側の規制だったのに対し、この法律では、そもそも大量の商品を投入し、短い期間で買い替えを促すビジネスモデルそのものに目を向けています。

法律では「mode ultra-express(超ファストファッション)」について、非常に多くの種類の商品を市場に投入すること、修理を促す仕組みが弱いことなどを組み合わせて定義したことが注目を集めました。

また、商品ごとのエコ・コントリビューションを調整し、
2026 年:0.25〜12 ユーロ
2027 年:0.50〜14 ユーロ
2028 年:0.75〜16 ユーロ
2029 年:1〜18 ユーロ
2030 年以降:2〜20 ユーロ
という段階的な負担を設定する仕組みが盛り込まれています。

さらに 2027 年 1 月からは、対象となる超ファストファッションについて広告を禁止し、インフルエンサーによる宣伝も規制されます。違反した場合の行政罰は最大 10 万ユーロとされています。

つまりフランスでは、
捨てずに回収・リユース・リサイクルする仕組みを作る
↓
売れ残りを捨てられなくする
↓
生産・販売のあり方そのものを規制する
というように、問題への介入地点を徐々に上流へ移しています。この背景には、政党、自治体、国の行政、消費者団体、NGO、NPO、学校、企業、EU 政策、一般市民や市民活動家などが議論をしあって法を変え、市民の意識を変えて、ゴミを減らそうとしていると働きかけてきた積み重ねがあります。

●フランスと日本、共に学び合い、新たな生き方、文化を作っていく
講演は「フランスと考える、洋服と廃棄の問題」というタイトルにしました。それは、フランス式の方法にも課題があるからです。
フランスがこういった仕組みや法律で対策をしている一方で、日本には「もったいない」という言葉に代表されるような、ものを長く使い、手入れし、ものとの関係に意味を見いだす考え方があります。今回と同様の講演をフランスの人に求められたら、私はその精神を強調して話すと思います。

人類学者ティム・インゴルドは、文化を固定された型やあらかじめ決まった知識の体系（着物とか、寿司とか、そういったザ・日本文化のようなもの）とは捉えず、私たちが世界と関わりながらつくり続けていくプロセス（実践）、目の前の限界を絶えず乗り越えて開いていく動きだと言っています。
今回の講演では、この文化観を手がかりに、廃棄物の問題もまた、既存の「正解」を当てはめるのではなく、私たち自身が新しい実践をつくっていく問題として考えました。

ゴミの問題を考えることは、私たちがどのようにものと関わり、どのような社会で暮らしたいのかを、つくり直していくことでもあります。つまりこれは文化づくりです。であれば、さまざまな文化の実践を知り、学び合い、試してみるということで、何か突破口が開ける可能性があります。

今回の講演では、その一例としてフランスの実践を紹介しました。貴重な機会をいただき、まことにありがとうございました。

マレーシアへ輸出したリユース品の行方と実情

㈱マーベラス・フロンティア　常務　佐藤正和氏

繊維リサイクルを基盤に、創業から 50 余年、中古衣料の輸出入、ウエス製品・リサイクルわた原料の製造・卸・販売、反毛原料の卸等の事業を行っています。マレーシアのペナン州に現地法人を立ち上げ 25 年になり、今年 9 月に社名変更いたしました。

マレーシアの自社工場へ輸出

今年 1 月～7月に国内で集めた古着の内、約12万トンの輸出先は、主にマレーシアで約 7 万トン、58.7%を占めています。次にフィリピンへは、約 1.5 万トン、12．1%程度の輸出量になり、以下韓国、タイ、カンボジアと続きます。
加須の工場から、衣料品を圧縮し、キューブの塊一つが約500キロのものを 48 個、24 トンのコンテナに詰めてマレーシアの自社工場に向けて輸出します。



マレーシアの工場では、圧縮してあるキューブのひもを切り、衣類をベルトコンベアに載せて選別します。濡れているものが入ってくると困ります。着物は別ラインで取り出すなど、人力で、かごの中に、もしくはシューターという箱の中へ分別していきます。
選別作業は、今のところ人間にしかできないので、主にマレーシア系、インド系、ネパール系などの女性が働いてくれています。選別したかごがいっぱいになったら男性が運びます。マレーシアの現場は暑いです。

リユース率は日本もフランスと同様、60%程度です。その他、ウエス原料になるものが約15%、反毛原料約15%。リサイクルできないものが10%近くあり、ごみになります。
ブルージーンズも購入してくれる事業者のオーダーにより、100 種類近い細かいカテゴリーで分けています。したがって、かごの数も多数です。2 階の選別作業場から、下の階の大きなかごに受け、100キロにして、圧縮梱包作業するのはバングラディッシュ人が多いです。
ツナギなどもそのままで売れます。 タイなどからもリユースの衣料品を購入に来ます。このように、マレーシア現地卸事業者として、リユース品販売に力を入れています。





ウエスとして利用

ウエスの原料にする作業もこの工場で行っています。T シャツのプリント部分を切り取り、袖を開いて一枚の布状にし、タグを取って、工業用のウエスにします。
写真は、20 年以上ウエスの裁断作業を行ってくれている長年の従業員です。



反毛として利用

冬物の繊維はマレーシアでは需要が少なく、反毛にします。反毛業者に売るために金具などを外し、フェルトにしやすいようハサミを入れて布切れとして売ります。布として販売すると税金が安くなるからです。

布団綿をリサイクルして枕とクッション製作販売しています。写真は、搬出の様子です。

マレーシア工場のでの仕分けや梱包の様子





リサイクルできない衣料品の行方は、臭い＆埃の山



向こうに見えているのがごみでできた山！

輸出した10％程度は、どうしてもごみにして捨てるものとなります。市の許可を得てトラックで衣料ごみを大きな山のようになっているごみ捨て場に搬入します。マレーシアにはおそらく焼却場はありません。4トン車で搬入しますが、臭い＆埃の巨大なごみ山にトラックで上がっていきます。分別はされていません。ごみ山のてっぺんで作業している人たちは金目の物を探している？ようです。搬入された様々なごみは、土と混ぜて積みあげて山になっているのです。一般廃棄物と一緒に埋めているので、臭いがひどい状態です。
今回、お盆明けから行ったペナンは、「ヘイズ」＝煙害、インドネシアの焼き畑からの煙のために霞んでいる状態で、風景もよくなかったです。
このごみ山は 30 年程度使っている廃棄場です。満杯になれば、また別の場所にごみ山をつくります。ペナン島の周りにごみ捨て山がたくさんできているが、そばにショッピングモールなどがあり、現地の人たちはあまり気にしていないように見受けられます。

リメイク品販売店



ペナン島ジョージタウンの TOKYO　NO18で販売しています。ジョージタウンは観光地であり、主にヨーロッ人が購入していきます。また、レコードや雑貨なども販売、お盆提灯　イスラム系の人が買っていったりします。直接小売りは 1 割程度です。

質疑応答

Q. Temu の製品について？　安価な理由が賃金を低くしてつくられているので買わない方が良いと聞いているがどうですか？
A. ユニステップスからも聞いているが、安価なのは、劣悪な環境で働いており、賃金を抑えているため。ユニクロやザラでも、バングラディシュのような国でコストを抑えて製造されているので、普通のファストファッションでも、良い環境で製造されているとは言えません。

Q. ごみの処分場に大きなまま、ミルフィーユ状態で土と混ぜて捨て場にしているのですか？
A. そうです。行政がらみではなく、マレーシアで片づけ屋さんから買い付けたものを販売し、売れ残りをごみの処分場に持ち込み、処分しています。

Q.フランス人は 10 着しか洋服を持たないというような本があったが、本日の話ではイメージが違っており、フランスも大量消費、大量廃棄しているということでしょうか？
A.10年ほど前に出たあの本は、フランスのハイソサイアティの家庭にホームステイしたアメリカ人が書いたもので一部のフランス人のことを書いたもの。モンペリーに住んでいた時は、周りも環境に関心が高い人が暮らしていました。しかし、地方で暮らすようになって気づいたのが、実際に多くの人は、安いものを買って、痛んでしまうのですぐに捨てて買い替えるというような生活をしています。

Q.ユニクロは、ファストファッションに入ってしまっているのですか？
A.フランスでは今日本が人気です。うまくいっていない感のあるフランスや世界から見ると、日本は何か違う精神性を持っているのでは？と期待しているようなところがある。ユニクロと無印良品など、手ごろな価格であるのに、大変高品質であり、ちょっとファストファッションからは外れているのかもしれません。日本文化に関する書籍で、経産省のコンサルタントをしている人の調査をライターとして参加させていただいて、その調査でも、日本の製品は高品質とされています。実際に私も、フランスのタイツは数回で敗れてしまい、日本で処分してきたユニクロの製品をフランスで改めて購入しています。
物を大事にすることが、捨てないことにつながる良いことなのだなと思います。

Q.フランスかの古着の約90％がアフリカに送られ、ガーナなどでは余ってしまい、もう送らないでほしいというようなことが起きているようですが、どういうことでしょうか？
A.アフリカに送らないでほしいと言っている人は、環境団体などの活動家なので、受け入れ団体である NPO の人たちとは違うということです。引き受けている NPO は継続を希望しているが、SHIEIN など品質が悪く、アフリカでもごみになってしまうと活動家の人は言っていました。

Q.フランスの熱波対策は？
A.あちらこちらにミストシャワーを設置。山火事防止のために、山への立ち入りを制限している。

編集後記
フランスからの衣料品のリサイクル事情の配信や、マレーシアのリサイクル品の取り扱い状況など、エコ・リサの活動も国際的になってきました。
見学会は、暑い真夏を避けて、ごみ処理やリサイクル施設を予定しています。ぜひ、ご参加ください。　（大前　万寿美）

エコ・リサ研修見学会のご案内

ごみ処理リサイクルセンター見学

久しぶりに、ごみ処理、リサイクルプラザを見学します。

開催日　　１１月２０日（金）

見学先

❶入間市総合クリーンセンター・リサイクルプラザ　　１０：００～１１：３０

❷豚のテーマパーク　サイボク（昼食休憩、買い物など）１２：３０～１３：３０
（自由行動　昼食代は各自）

❸狭山市稲荷山環境センター　　１４：００～１６：００

集合場所　　稲荷山公園駅　北口　（西武池袋線）

集合時間　　９：１５
（幸手駅東口よりバスに乗車できます　7:20）

解散予定　　稲荷山公園 16:30　　幸手駅 18:30

参加費　　2,000 円　（幸手より乗車の方は 3,000 円）申し込み時明記

定員　　20 名

申込方法　エコ・リサ　ホームページより

締め切り　11 月 12 日（木）